

新島八重と洋装

——ドレスの再現製作をめぐる——

清水 久美子

只今ご紹介を頂きました清水でございます。

去年、新島八重のドレスを再現するという素晴らしいお仕事を頂きまして完成できましたが、その間に感じたことや製法も含めまして、いつかどこかでご報告したいと思っていました。今回このような席を設けて頂き、ご報告する機会が得られまして本当に感謝しております。実は今日雨でなければ、ドレスの実物をお借りする予定でしたが、シルクなので断念いたしました。もしもまだご覧になられていない方は、お帰りに史料室を訪ねて頂けましたら幸いです。

これから八重のドレスに用いた世界一軽い「川俣シルク」をお返ししますので、実際に触って頂けたらと思います。もう一つの腰パッドはバスの後ろを膨らませるもので、ワコールさんからお話を聞いて作りました。ゼミ生は「餃子」と呼んでおります。

八重の生涯については概略を少しお話しし、エピソードから八重の人物や、当時京都でどのように洋装が進んでいたのか、八重が洋装した理由と背景を考えてみたいと思います。そして八重のドレスの再現の目的といきさつ、取り組みの流れ、寄贈と展示、その反響についてご報告し、最後に再現して感じたことをお話しさせていただきます。

1. 八重の生涯

・会津若松時代 (～27 歳)

八重は幕末の弘化 2 年、会津藩砲術師範山本権八と佐久の三女として生まれました。姉の 1 人は嫁ぎ、1 人は亡くなったといわれています。砲術が大変得意で力持ちということは NHK のドラマにも出て参りました。八重の精神的な基盤となった教育は「什の掟」といって、「嘘をついてはいけません」、「弱者をいじめてはいけ

ません」という、本来男の子が道徳訓を学んで暗唱するものでした。八重も一緒にこれを暗唱したといわれていて、人間として備えるべき必要最低限の徳目を小さい時から身につけていたことがわかります。

男の子が 10 歳になると藩の教育機関「日新館」に入学し、『日新館童子訓』を学びます。女の子の八重は入学できませんが、父から学び 10 歳で暗唱できたといわれています。ここは文武両道に優れた武士を育成するところであり、八重も父の教育を受けて会津藩士の心得を身につけていたと思われます。日新館には今年 2 月、大雪に遭って大変でしたが、どうしても見たくて行って参りました。大変広くて一つの大学ぐらいの大きさのところでした。

20 歳頃に川崎尚之助と結婚しました。彼は出石藩(今の兵庫県)出身で、「日新館蘭学所」の教授を務めていたといわれています。鶴ヶ城開城後には、東京で一時期謹慎した後、斗南藩(今の青森県)に移り、お米をめぐる外国人との紛争に巻き込まれ、大変な思いをして、明治 8 年に死去しています。

いよいよドラマでは来週から鶴ヶ城に籠城することになります。その前の鳥羽伏見の戦いで弟三郎が亡くなり、兄の覚馬が捕えられ、8 月に会津では高齢者、女性、子どもを巻き込む悲惨な総力戦に突入します。これは八重が籠城した時の格好を後で再現した写真で、髪の毛を切って男のような姿で入城しました。その間に父が亡くなり、1 日 1,200 発もの砲弾の嵐をかいぐって、危ない目に遭いながら何とか生き延びました。こういう大変な時でも八重は、着弾した不発弾を分解して、松平容保公にその仕組みを説明したという、落ち着いたエピソードが残っています。

1 ヶ月後に籠城が終わって開城になりますが、八重はその前夜にかんざしで城壁に和歌を刻んだと伝えられています。これは「明日の夜は何国の誰かながむらん な

れし御城に残す月かげ」という有名な歌で、お城に対する惜別の思いが歌に託されています。この写真が砲弾で傷ついた鶴ヶ城で、土井晩翠が作詞した「荒城の月」のモデルになったとの説があります。これは白虎隊のお墓の写真と一緒に、ずっと八重が所蔵していたものです。「どういう気持ちでこの写真を眺めていたのか…」とありますが、今同志社大学の新島ルームで展示されています。

・同志社時代

開城の後、多くの会津藩士と家族は斗南藩に移りましたが、八重一家は行かずに米沢藩の内藤新一郎方に1年間寄留します。そして明治4年に母佐久、姪峰と一緒に、当時京都府顧問として京都の近代化政策に参画していた兄覚馬を頼って、京都へやってきました。覚馬の妻うらは一緒に来ないで、そのまま別れてしまいます。

そして明治5~8年、多分覚馬の勤めもあったと思われるのですが、京都府初的女子中等教育機関である「新英学校及女紅場」（鴨沂高校の前身）に勤務します。ここで八重は寮母の仕事をしたり、礼法、養蚕、機織を教えました。当時英語の先生としてイギリス人のエヴァンス夫人が勤めていましたので、ここで英語を習い、また茶道の圓能斎の母にも新英女学校で出会っていましたので、後にそれらを身につけるきっかけになったようです。

そして明治6年、覚馬が京都博覧会に際して『京都観光英文ガイドブック』を作成した際、八重が活字を拾ったことから、日本初の英文植字工ともいわれています。つまり英語がこの頃かなり身につけていたと思われる。

明治8年に宣教師ゴードンに聖書を学んでいた時、襄と出会い婚約して洗礼を受けます。明治9年に京都初のキリスト教結婚式を挙げ、宣教師デイヴィス夫人からウェディングドレスを借用したといわれています。襄32歳、八重30歳で2回目の結婚でした。

襄は理想の妻について、「亭主が東を向けと命令したら3年でも東を向いているような東洋風の女性はごめんだ」（横村正直）と述べ、「八重は決して美人ではないけれども、美しい行いをする人、それで十分満足です」（ハーディ夫人）と手紙で書いています。ここから美しい行いをする人を「ハンサムウーマン」というようになりました。

こちらはいずれも襄と八重の新婚時代の写真ですが、右の方は扇を手に持ち、着物はお引きずりで正式な衣装として着用されているものです。結婚して少しした時で

すが、30歳に思えない初々しい表情で、丸顔の童顔で本当に可愛らしい感じを受けます。「女丈夫」とかいろいろいわれた女性ですけれども、結婚の頃には恥じらいを秘めた可愛い女性だったのかなと思います。

同志社では、宣教師で同志社英学校校長であった襄の夫人として教会活動を支え、各地へ一緒に出かけて教会で説教もしました。襄が家族を引き取って父母や姉と同居すると、襄から食事の細かい指示があり、それに従って両親の面倒も一生懸命にみたとのことでした。また襄と共に、学生の学資を援助したり、病気の学生を家に引き取って看病をしています。そして襄の日常的な世話は勿論、後には襄の看病に明け暮れる日々が待っています。

同志社女学校の教師としても働きます。初めは私塾でスタートし、女子塾となり、女性宣教師スタークウエザーと一緒に教えていました。英語のスプリングと小笠原流礼法、同志社女学校に改称してから礼法の教師として働いています。

ところが寮の舎監であった母佐久と八重は共にスタークウエザーと反りが合わず、確執を起こすこととなります。どちらが悪いというのではなく、教育をめぐる日米文化摩擦というものでしたが、スタークウエザーは心身共に疲れてアメリカへ帰ってしまいます。八重の方は襄の永眠後、女学校とは次第に距離を置いていきました。

・社会奉仕の時代

明治20年に京都看病婦学校、同志社病院が設立されました。20年であれば、襄は3年しかこの学校を見守れなかったのです。襄が明治23年に亡くなると、八重はその3カ月後に日本赤十字社の正社員になります。正社員は同時に篤志看護婦会に所属できるので、多分そちらにも所属したと思われる。正社員は一定金額の寄付をすれば得られる称号だそうです。病院や看病婦学校設立という、襄の医学への思いを十分に知っている八重ですので、その思いを受け継ぐ形で篤志看護婦会に入ったと思われる。明治27年の日清戦争、38年の日露戦争では、広島、大阪の病院で従軍しています。その時の功績が認められて、勲七等、勲六等の宝冠章を受章しました。

篤志看護婦会は、明治20年に有栖川宮熾仁親王妃董子の令旨により設立され、社会的影響力を持つ女性が所属しました。八重も当時有名でしたので、活動するだけで相当影響力があったと思われる。彼女は監督官として若い同志社看護学校の生徒を率いて看護活動に専念しました。そして当時社会的地位があまり高くなかった

看護婦の立場を向上させることに貢献したといえます。

それから慈善活動にも活動の場を広げて行きます。明治18年に設立された「京都婦人愛隣会」という同志社のクリスチャン女性を中心になっていた会があり、八重は幹事をつとめました。これを母体に明治20年、「京都婦人慈善会」が発会しました。発会式には襄と八重が出席しています。つまり襄の意思もそこあったのです。明治32年に八重は副会長をつとめていました。横浜市伊勢佐木町の大火事で3,000名程が被災した時、八重が代表して寄付をしています。また募金活動など様々な慈善活動にも精を出して行きます。

この慈善会は皇后の令旨から始まり、京都府の北垣知事が尽力して設立されました。非常に困っている窮民や災害に遭った人を救助したり、貧しい人の教育をする経済支援団体の一つでした。初代会長は伊藤博文夫人梅子で、慈愛女学校を設立・経営し、学費が払えない女の子に無料でミシン、裁縫、手芸を教え、女性の自立を促す社会団体でした。

「愛国婦人会」にも入っていました。これは日清戦争を契機に設立され、兵士の慰問、遺族への経済援助をしました。これも一定金額を納付したら入会でき、八重はその設立に尽力し、後に通常委員になっています。

また襄の生前の遺志を継いで、同志社以外の学校や社会福祉施設、被災地に多くの寄付をしています。

・茶道家の時代（～86歳）

晩年はお茶三昧の生活に入ります。茶道は日清戦争の頃に入門し、晩年の八重の心のよりどころ、精神的な支えになったと思われます。襄千家13代家元圓能齋に入門し、新島邸にお茶室「寂中庵」を設えました。その扁額には圓能齋の揮毫があります。そして宗竹というお茶名を頂いて女学生にお茶を教えていたそうです。

八重は昭和7年6月14日に急性胆嚢炎で亡くなります。米寿のお祝いをした後の数え88歳（満86歳）という、当時としては長寿でした。その1カ月前までお茶会に出席し、自分のことは自分でして、一人で新島邸に住んでいました。急性だったので、亡くなる直前まで元気で、「天寿を全うした」といえると思います。

2. 八重の人物・エピソード

ここでは様々な著述から、八重のエピソードなどを抜き出して、私なりにまとめてみました。

「大らかさ」、「大胆さ」、「動じぬ心」、これらは既に様々なところで述べられています。

スタークウエザーとの確執は前に述べましたが、彼女は八重の悪口をアメリカンボードに手紙で書き送っています。手紙には、「押し入れの中におさまって学校の中を歩き回らなければ、骸骨（八重）のことを書かないで済んだのに」と書かれていて、学校の教育に携らないでほしいと述べています。一方八重はスタークウエザーについて何も述べていません。聞き流していたのかも知れません。

また京都に来てから覚馬は、後妻に時栄を迎えました。後に時栄の不倫が発覚して離縁になりますが、八重は時栄を絶対に許さず、「ならぬものはならぬ」という子どもの時にたたき込まれた精神がまだまだ健在であったことがわかります。襄は許してもよいのではと温情を示しますが、余りにも八重が言い張るので、その強情ぶりにあきれてしまったそうです。でも、よくないことはよくないというのは当たり前のことだと思います。

「ユーモアの心」、これがあまりドラマに出てこないのでも残念なのですが、襄は非常に厳格で、短気で、怒りがすぐに顔に出るタイプだったようで、八重はちょっとおかしいなと思った時に、「今日は天気がよいのに雷が鳴りそうだ」と事前に冗談をいって、襄の気分をほぐして転換をさせようとした。また家に遊びに来た知り合いの子どもに団扇型の干菓子を出した時、「これを食べたらお腹で風が起きますよ」と冗談をいったところ、それを聞いた襄に、「いくら子どもといってもそんな嘘をいってはいけません」とたしなめられたそうです。この夫婦はよく正反対の性格だといわれますが、良いコンビというか、それぞれに違う面がうまく生かされているように思います。

その子どもの家を八重が訪ねた時には、「狭き門より入れよといわれても、このくぐり戸は通れないな」といながら、太った体を押し入ってきた」という子どもの記述が残されています。太っていたので狭い門が入りにくかったようですが、普通に入れば良いのに「狭き門より入れよ…」とのセリフをいながら入ってくるところがとても面白い人だと思います。

「世話好き」については、学生をよく自宅に招いて食事をもてなし、会津板カクタで遊びました。それが大変楽しかったと学生が後に述べています。八重は身体に似合わぬ優しい声でカクタを高らかに読んだそうです。恐らく怖い声なら身体に似合ったのですが、すごく優しい声だったと述べています。

「新しい物好き」、これは当時英語とキリスト教と洋装という3点セットが西洋文明を体得する大事なキーワー

ドであったことから、八重はそれを身につけようとししました。また写真が大好きだったようで、写真館で1回に3ポーズの着物姿を撮ったり、洋服を2回も着替えて撮っています。ただし残された写真は裏の生前中に集中し、裏が亡くなってからは減ってしまいます。つまり写真は自分が楽しむだけでなく、裏に見せたい、見てもらいたいとの思いがあったと思います。

それから「女性らしさ（繊細さ・幼な心）」ですが、これは他の方がお書きになっていないので、是非強調したいと思いました。この写真は八重の手芸作品です。紙でできていて、その上にきれいな花の貼り絵がしてあります。紙を切って、1mmにもならない細い葉脈が貼られていて、繊細な感性と根気、手先の器用さがないとできないものだと思います。山本八重の印がありますので、結婚直前の手芸作品だと思います。裏には英語で「Yae」、「Josef」という文字が一生懸命練習したように書かれています。もうすぐ嫁ぐ日が近づいている、そういう八重の心情が裏側のサインに表れているようです。

現在雛人形が史料室に飾ってありますが、八重は幾つか雛人形を持っていて、特に晩年雛人形を愛用し、雛祭りも行いました。雛人形が大好きでとても大事にしていたことから、年を重ねても「幼な心」をなくさなかった、八重の「女性らしさ」を強調したいと思いました。

そして終生変わらなかったのが「会津への思い」です。明治15年、開城後初めて裏と会津に出かけています。この時いろいろな古戦跡を巡り、裏を鶴ヶ城に案内しました。年数が経ったとはいえ、当時の傷痕はなかなか癒えないと思うのですけれども、どういう気持ちでここを訪れたのかなと思います。

明治38年に「京都會津會」が発会し、八重も参加しています。京都守護職松平容保の本陣のあった黒谷の西雲院に会津藩殉難者の墓地があることから、毎年慰霊祭が行われ、現在も続いています。弟三郎もここに合祀されています。この会では会津からわざわざ食材を取り寄せて郷土料理を楽しんだり、会津板カクタを楽しんだり、会津ゆかりの人たちが集まり、菩提を弔いながら同窓会、県人会のようなこともしております。

昭和3（1928）年、松平容保の孫勢津子姫と秩父宮（昭和天皇の弟）のご成婚があった時（八重が亡くなる4年前）、朝敵になったその汚名をそそぐことができた八重は何よりも喜びました。82歳の高齢でわざわざ一人で祝いの言葉を述べに東京の勢津子姫のところまで行きました。

「いくとせか峰にかかれるむら雲の 晴れてうれしき

光をぞ見る」

今まで胸のところにづらい雲がかかっていたのが、ようやくこれで晴れたという、八重の心情がこの歌によくあらわれています。

八重はまた会津から修学旅行生が来ると黒谷に案内し、『日新館童子訓』の序を暗唱して生徒たちをびっくりさせたそうです。そして亡くなる1年前、実家である山本家の墓所の石碑を会津若松市の大龍寺に建立します。石碑に自ら揮毫もしています。いつまでも実家や先祖への思いは消えることがなく、京都にいても会津に石碑を立てて菩提を弔った、そういう人なのです。

このように八重の人柄については、男らしさもあれば女らしさもあり、大胆にして繊細で、非常に多面性を持った人だと思います。でもその中に一本筋の通った強い信念を持ち、困っている人や弱っている人、大変な状況にある人に対する優しさを終生忘れていない女性だったと思います。

3. 八重の洋装

・京都における洋装

日本女性の洋装は一番に東京から始まったと思われるでしょうが、最初は明治4年11月の「横浜毎日新聞」に「西京（京都）二条新地の芸妓が7人散髪、洋服、あるいは棲高袴で遊歩して座敷に出て、お客さんも多かった」との内容が書かれています。私も全然知らなかったのですが、京都の先斗町、祇園などと同時期に川端二条にも花街があったのです。その芸妓が洋装し始め、その後東京や長崎丸山の遊女も洋装しました。京都における洋装写真は見つかりませんので、長崎丸山遊女の写真をお出しました。これはクリノリンスタイルといって、スカートが円形に広がり、上はぎゅっと胴が狭くなった窮屈な服を着用しています。

明治9年には、八重が結婚衣装を着ています。恐らくこの時代のファッションであるクリノリンスタイルのウェディングドレスだったと思います。

明治19年になりますと、京都府尋常師範学校校長の八代規がにわかに洋装化を推進し始めます。彼は当時の文部大臣森有礼の友人で、中央で洋装化を進めているので、京都でも協力しなければとの思いで始めたと考えられます。この学校は今の京都教育大学の前身で、エスデールというドイツ人女性を雇い、生徒と女教師に欧風を心酔させる目的で、洋裁、編物、英語、料理を教えさせました。同志社より先にこういう動きが始まっていた。

また彼は婦人会を作り、京都府庁に勤める高等官の夫人方を集めて、エスデールから洋裁を学ばせ、下着、上着、ブロースなど自家製の洋服を着用させました。

明治20年には、「皇后の思召書」が出されました。これは新聞や『女学雑誌』にも報道され、ある程度は行き渡っていたのですが、洋服を奨励し、しかも国産の洋服地を使うようにという内容の「思召書」で、皇后自ら女性の洋装化を奨励しました。

東京では明治16年から鹿鳴館が建設され、夜な夜な洋装の舞踏会が行われていましたが、京都では別の形で洋装が奨励されました。皇后は1カ月間、関西地方や名古屋を巡幸して、洋装姿を披露し、自らお手本を示したのです。それを受けて、北垣京都府知事は懇親会を催し、伊藤博文夫人を招いて思召書を説明してもらい、大阪、兵庫、滋賀の知事の夫人方を同席させ、洋服を着てもらい、洋装を普及させるための協議をしております。

また八重が入っていた京都婦人慈善会でも北垣は会長をつとめ、皇后の令旨を述べて洋装の普及について協議しています。この時参加した女性5~6名が洋装でした。ひょっとしたら八重がその中に入っていたような気がします。

そして西陣では洋服生地を織ることが始まり、綾緞子、小紋形ちらしを作り出しました。西陣織物を扱う平島商店は東京の店ですが、洋服の裁縫も始めます。同志社女学校でも20年になって「洋服裁縫」の科目が設けられ、洋裁の授業がスタートします。

この写真は明治20年頃の京都の上流婦人のバウンススタイルのドレスです。コルセットを着ているようですが、オーバースカートのタック、ドレープのとり方が素人っぽくて、日本人が作ったような感じを受けます。

このように京都では、率先して洋装推進に取り組む風潮があったことは事実です。八重の洋装の写真も20年から22年の間に撮られ、特に21年に集中しています。

・写真にみる八重の洋装

具体的に八重の洋装はどういうものだったのかを同志社史資料センター所蔵写真をもとにご紹介したいと思います。

最初の新婚当時の写真は和洋折衷で、いきなり洋服を着るところまではいきません。着物に帽子と靴。この靴は今の男性靴のようで、かか上が上っていません。八重はハイヒールもはいたようで、裏がハイヒールをはいている八重が転ぶと危ないからと、ヒールを切ってしまった逸話もあるぐらいです。このようなスタイルを徳富蘇

峰らが「鶴」つまり化け物のようだと言っています。初期はこれぐらいしか写真は残ってなくて、殆んど和装が中心になっていきます。

でも八重らしいオシャレとして、着物の半襟にブローチをつけている写真がたくさん見つかりました。この写真は洋服の胸の襟のところにブローチをつけていて、これが普通のつけ方ですが、八重は和装でもブローチを襟元につけ、同じものを和洋両用で扱っています。このような例は今まで見たことがないので、八重だけの独特のおしゃれだったと思います。

本格的な洋装は明治20年頃から出現します。この写真は20年6月の撮影で、夏用の縦縞木綿で、立襟、前開きで多くのボタンがついています。下はわかりませんが、ドレス風のものだと思います。こちらはツーピースですが写真が不鮮明で具体的にはわかりづらいです。

この写真が一番正式な夜会用ドレスです。上半身と下半身のツーピースで、後ろにオーバースカートがのぞき見えますので、いわゆるバウンススタイルのドレスの正装です。ピカピカ光っているので恐らくサテン地、先ほどお話ししたものと同じシルクサテンではないかと思えます。立襟で前開きに装飾があり、扇を持っていますので正式な服装として着用されたことがわかります。

この写真が今回再現したドレスで、デイドレスという昼間用外出着です。帽子と手袋をしていますので外出スタイルだと思いますが、シルク地かウール地かも知りません。立襟があって、パネル(胸当て)がついているのが特徴です。再現するにあたって文献資料で同じデザインを探しましたが1点もありませんでした。できるだけそれに近いものを参考にしましたが、八重のドレスはオリジナルなデザインではないかと思えます。

今の写真は八重43歳の誕生日の撮影で、同日、同写真館で別の服に着替えて撮ったのがこの写真です。帽子は同じですが、ドレスは前開きでピンクタックがしてあります。

明治22年の写真は、先ほどの正装ドレスと全く同じもので、同じドレスを別の日に上半身だけ撮ったことがわかります。同じドレスでもう1回撮るのは、よほど気に入っていたのでしょう。

この頃の欧米ファッションはバウンススタイルで、アメリカではこの写真のようにウエストを狭めて、細い袖がつき、腰から後ろに布をたくし上げて膨らませるというスタイルですが、八重のドレスもよく似た後ろスカートを付けています。当時の欧米の流行ファッションを八重は身につけていたといえます。

裏が亡くなってからは、洋装の写真もバツリとなくなり、次に洋装が見られるのはずっと後で、看護服姿だけです。日清・日露戦争で洋式看護服が導入され、そのスタイルの写真が残されています。これは篤志看護婦人会の制服と制帽で、この制帽は八重が自分で所蔵していました。こちらは日赤看護婦の看護衣と看護帽です。これは日露戦争の時のもので、両方に所属しておりますので、どちらの制服を着てもおかしくはありません。

・洋装の評価と理由

これまでの八重の洋装について、他の人からはどういふふうの評価され、見られていたのでしょうか。新しいことをあまり好まず伝統を重んじる人は、かなり批判的ですが、評価する人も勿論ありました。湯浅一郎は「立派な洋装で、靴をはいて、時計を持って、指輪を身につけた今日の貴婦人の様子だった。そして、立派な風采の夫婦であり、裏とよく釣り合っていた」と述べています。八重自身、洋装するという事は、裏も洋装ですから、裏との釣り合いも考え、配慮した上でのものであったと思います。

これは自分の洋装写真をジュリア A. E. ギュリックというアメリカ人女性に送った手紙の返事ですが、「とても自然体に見えてよく似合っています」というほめ言葉ももらっています。

八重の洋装については、いろいろという人はありましたが、八重自身は批判を気にしないで、裏の夫人としてふさわしい装いだと自覚して洋装していたのではないかと思います。

洋服の入手法としては、借りたり、譲り受けたり、和服と交換したり、実際購入したり、アメリカに休暇で帰った女性宣教師に買ってきてもらう、などが考えられます。この写真のように、パーミリーと峰が洋服と着物を取り替えて撮るということが当時流行っていて、実際に交換したかも知れません。

この同志社女学校の卒業式写真には、両側の女性宣教師が洋装をしています。八重は宣教師の洋装をいつも間近に見ていますので、入手先を聞くこともできたでしょうし、借りたり、自分で買い取ったことも十分考えられます。

ただ当時、日本のドレスメーカーはあまり存在してなくて、デントンという有名な女性宣教師が1890年に、「日本でドレスを買うのは大変で、高くて技術は悪く、ドレスメーカーは少ないので被服費をアップして下さい」という内容の手紙を派遣先のアメリカンボードに送

っています。デントンですら日本で洋服の入手に苦労していたということがわかります。

ドレスの値段については、巡査が1カ月12円の給料だった時に女性の洋服が12円、または40円、もっと凝ったドレスなら120円と、資料によって様々な説があり、現時点では確定できませんでした。

八重にとっての洋装とは、宣教師・校長夫人としてのプライドと共に、外観を変換することによって内面も変換して、新しい人生をもう一度生き直すという「復活・再生」への決意と実践のあらわれではないかと思われます。もう一つには当時の社会的要請があり、国家的な取り組みとしての洋装化が国是であり国の方針でしたので、それに協力することも後押しになったと思います。

4. 八重のドレス再現

・取り組み

再現の目的については、先ほどご紹介頂きましたので端折らせて頂きます。東日本大震災の復興支援の一環として、同志社と福島県との協力体制のもとで、いろんなイベントを計画していこうという中で、八重のドレスを再現して展示したいというお話がありました。2着作って1着は福島県に寄贈し、1着は本学に残すということでした。

昨年4月からスタートし、9月に1着、11月にもう1着を必ず完成しなければならないということで、人間生活学科の「応用演習」の授業時間と時間外に製作をしました。製作者は応用演習服飾文化ゼミの3年生12名と助っ人として卒業論文ゼミの4年生3名の合計15名の学生と助手1名、教員の私1名で製作をしました。

ただし再現するドレスは授業で作る以上、単なるコスプレとか仮装行列で表からそれらしく見えるものではなく、きちんと時代考証して忠実に再現したいと考えました。布地は福島県名産の川俣シルクを使い、裏布はコート用ポリエステル100%で、表地と裏地がなじまなくて苦労しました。

再現までの流れですが、ドレスの正式依頼を頂いてから4月・5月は当時の西欧衣装と八重について基礎知識を身につけようと、ゼミ生それぞれ調べたことを発表しました。そして新島旧邸を見学し、京都服飾文化研究財団所蔵の実物遺品を調査し、下着などの作り方を教えて頂きました。

5月には型紙を作り、木綿で試作し、腰パッドを作りました。6月下旬にやっと川俣シルクが届きましたので、布を裁断し、印をつけて、身頃の本縫いが始まりま

した。腰パッドだけでは後ろの膨らみが出ませんので、後ろにギャザーを寄せたパニエも作りました。

次にカフス、襟、スカート、袖に着手していきます。袖はでき上がった時には曲がった状態になっていて袖山も低くなっています。服が窮屈なので、手が上まで自由に上がるよう工夫されていました。裏地はその都度表地と縫い合わせました。そしてスカートの襷を取り、ベルトをつけ、身頃に襟がつかしました。こちらはオーバースカートの襷をどうやってとろうかと寒冷紗を使ってドレープが出るよう試行錯誤しているところです。

9月の初旬には、ようやくドレスが完成し、9月3日に記者発表があって、ドレスを再現製作したことを新聞紙上で一斉に報じてくださいました。9月6日には福島県庁でドレスの贈呈式がありました。

これが再現したドレスの写真です。ボタンで前が開いて脱ぎ着ができるようになっています。バスト90cm、ウエスト70cm、ヒップ90cmを八重さんサイズに決めましたけれども、ウエストは74cm位に仕上がっています。ウエストが絞れているのはダーツと切り替えによるものです。そして後ろスカートにはオーバースカートが乗っています。写真では後ろが見えないので、好きなように縫い縮めたりしながらドレープを作りました。

これが贈呈式の写真です。学長先生と一緒にゼミ生3名が代表で出席してくれました。そして佐藤知事と懇談して、お昼のお食事と一緒に頂きました。

その後、二本松市歴史資料館の「新島八重の生涯と戊辰戦争」というテーマの展覧会で展示して頂きました。そこでは八重のドレスと一緒に裏の実際のコートが手をつないだように展示されていました。女性の学芸員の方が「ただ横にずっと並べるのではなくて、手を合わせて130年ぶりに2人が再会しました」といって喜んでおられました。

2013年2月の福島県立博物館（会津市）のパネル展では、八重のドレスは大きなガラスケースに入れて正面にでんと飾られていました。事前に予告写真を見た時にドレスの胸の皺が気になってしまって、大学からの指示ではなかったのですが、助手さんと一緒に会津まで皺を直しに行ってしまいました。何とかきれいな形になりました。

右の写真が昨年11月にできた女子大学の史料室のドレスです。

また今年の8月7日から京都の高島屋百貨店で京都商工会議所と協力して福島物産展をされるそうです。その時1階フロアに福島県に寄贈したドレスが里帰りしてく

るので嬉しくて、嫁いだ娘が帰ってくるような気がしております。

・ドレスの反響

このドレスには大きな反響がありまして、新聞、テレビ、雑誌、インターネットなど各メディアを通して報道してくださいました。NHKの3つのテレビ番組にも取り上げられ、ゼミ生も一緒に出演しました。全国的に報道されたことから、特に二本松市の八重の企画展示では、記録的な来場者数になりました。「あの新聞で見たドレスはありますか」と、開口一番ドレスを確かめてから入ってくださるそうで、本当に有難いと思っています。

また川俣シルクを使ったことで、福島県の織物産業の復興・再生を後押ししてきたとの記事もインターネットの「福島民友トピックス」に掲載されました。「人間生活学科の学生さんが再現した…注目度の高い八重のドレスへの採用は県内織物業の復興・再生を後押しする」、さらに「アルマーニ、桂由美、八重のドレスに使ってもらった」と書いて頂きました、アルマーニとは全然格が違うのにとびっくりしましたが、それぐらい喜んでくださったと感じることができました。

最後にドレスを再現して思ったこと。このプロジェクト事業は本学の広報課、同志社社史資料センター、福島県観光交流課の三者が緊密に連絡をとりあって実施することが決まりました。これは同志社大学ではできない、同志社女子大学の知的財産を活用したもので、生活科学部であったからこそできたことだと思います。

ドレス製作は本当に時間に追われて大変でしたが、ゼミ生や助手さんの努力と奮闘の賜物でもありました。ゼミ生の中には大学で被服製作実習を全く取っていない人が3名おりましたが、それなりにしっかり活躍してくれました。初心者でもみんなで力を合わせて真摯に向き合えばできるものだと知り、私も本当に嬉しく思いましたし、ゼミ生それぞれに達成感を感じたことでした。

再現したドレスに多くの関心を持って頂いたということは、ドレスというもののインパクトが大きかったからだと思われれます。人の着るもの、形になって見えるもの、つまり服飾の持つ力、発信する力、アピール力の大きさを改めて感じさせられました。私たちの拙い仕事でしたが、被災地の皆様には本当に喜んで頂いて、今でもドレスを大切に扱ってくださっていることをとても有難く感謝しています。

このような素晴らしいお仕事を与えて頂きました同志

新島八重と洋装

社女子大学、そして本プロジェクトの依頼を快諾してくださいました前生活科学部長、生活科学部の皆様にも本当に感謝したいと思います。時間が切迫してきてつらい時に、道で会うたびに先生方から「頑張ってるね」とお声をかけてくださいましたことが、とても励みになりました。この場をおかりしましてお礼を申し上げたいと思い

ます。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、除染がやっと終わったばかりという、放射能の大変な被害があったところもありますが、一日も早い東日本の復興を心よりお祈り申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)